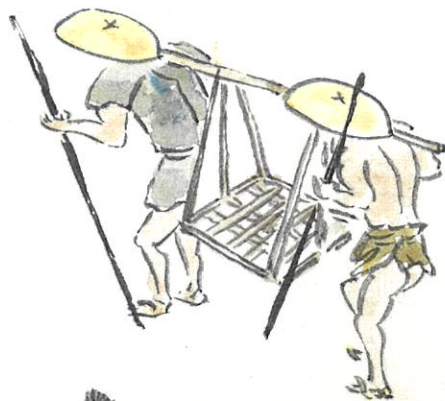


長門者はなし



長門昔ばなし



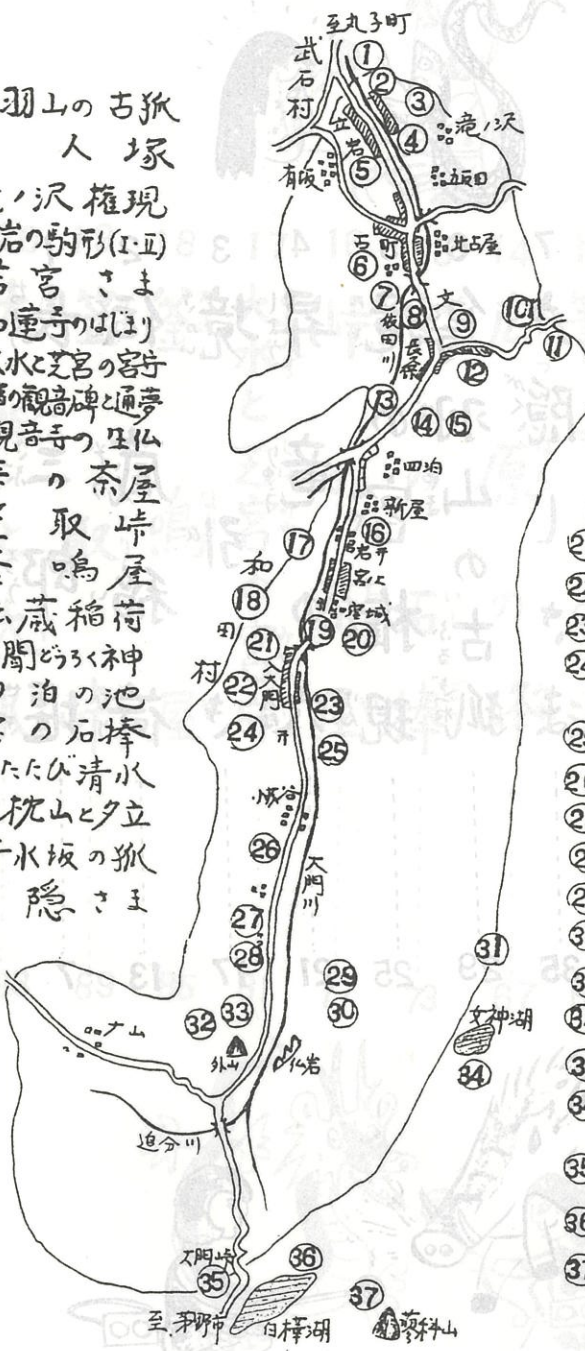
念刊によせて

わが達の住む美しい山や川には昔から語り伝えられた伝説や民話がたくさん残されていたと思っております。これはわれわれ祖先の歴史であります。

だれも皆これを聞いて成長しやがてこれを伝え生涯を送って来たと思っております。ところが世の中が急転すると多忙になり、そのいくつかが消え去ろうとしています。かりがえのない無形の文化財の消滅は魂の断絶であります。現在行なわれている町の諸事業にしても

長門むかし話の分布

- ①鳥羽山の古狐
- ②千人塚
- ③滝ノ沢権現
- ④立岩の駒形(I-II)
- ⑤若宮さま
- ⑥西蓮寺のばり
- ⑦大水と芝宮の宮寺
- ⑧峠の観音碑と通夢
- ⑨観音寺の生仏
- ⑩峠の茶屋
- ⑪笠取峠
- ⑫釜鳴屋
- ⑬伝蔵稲荷
- ⑭不聞のく神
- ⑮四泊の池
- ⑯宝の石棒
- ⑰またたき清水
- ⑱戸枕山と夕立
- ⑳戸隠さま



- ㉑名月と常福寺
- ㉒名主予と村わか
- ㉓丸岩の膳苑
- ㉔奥の院武の宮と
信玄杉
- ㉕長三部堰
- ㉖小立とぎの女
- ㉗強清水
- ㉘広原の峰
- ㉙大蛇と大水
- ㉚昇竜の穴
- ㉛手惣塚
- ㉜筆よしの沢
- ㉝外山の石碑
- ㉞引石と
カッパの池
- ㉟境引き
- ㊱音無し川
- ㊲琴科山と甲賀三郎

過去の実績や累積のうえにたって行なわれている、
 とは言うまでもありません。
 祖先の粒々辛苦のあとと文化の初心と言われれる民
 話や伝説と通じてふれながらさらさら今文化と向上
 発展させるための心の糧とすることと念願し、有
 効に利用されるよう願って止みません。

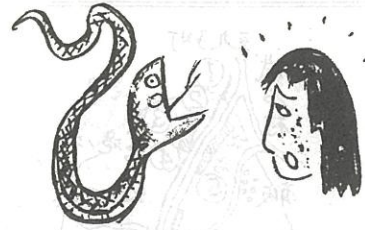
昭和十年初夏

北澤貞利

(長門町教委教育長)



20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
大	笠	釜	大	峠	宝	広	筆	名	千
蛇	と	鳴	と	の	の	原	よ	主	人
大	取	宮	宮	茶	石	の	し	争	村
水	峠	屋	守	屋	棒	峰	沢	い	わ
								と	か
								村	れ
								わ	か
								か	れ
								れ	か
								か	れ
93	89	85	81	77	73	67	65	59	55



10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
奥	清	不	戸	鳥	滝	昇	境	伝	長
の	水	聞	隠	羽	の	竜	蔵	三	も
院	坂	ど	し	山	宮	引	稲	郎	く
武	の	う	の	の	権	の	荷	堀	じ
の	狐	ろ	古	推	現	穴	き		
宮		く	狐						
と		神	ま						
信		ま							
玄									
杉									
51	45	39	35	29	25	21	17	13	7



7 長三郎堰

長三郎堰

春とはいえ信濃路はまだうすらさむく夜になると冷たい風が長門の狭間を吹き抜ける頃のお話です。村の家々は夕食をすませ、いろいろの火をおとしぼつぼつねようとする頃です。五、六本のたい松と二つの堤灯が入大門の村はずれお稲荷様のあたり東山の山すそを行ったり来たりしています。

「ありやあいったいなんずら狐火じゃああるめえなあ……」次の晩は入大門の部落をとり抜けて小吹(今の窪城)の部落に現れ、その次の夜は、宮の上の部落の入口に現れます。「狐の仕業にそういねえ。村中にこんなうわさが立ちはじめました。」

中に威勢のいい若者たちが「今夜こそ狐の野郎をふんづかめ



21	若宮さま	98
22	立岩の駒形その三	101
23	小豆とぎの女	105

題字 龍野翔雲先生
表紙 鷹野原鳳悦先生
さし絵 児玉断



らずわ……」と四、五人の若い衆が相談して夜を待っていました。案
 の定、東山の山すそに狐火が現れました。

「それでたぞ。」威勢のいい若者たちが手に
 捧ぎれなどを持ってとびつけました。

とびつけてみると、それはなんと隣り

村、長又保の人たちでした。とびつけた若者

に「やあ、おつかれでござす……」と顔見

知りの一人から声を掛けられ、若者たちは

きまりが悪くなり「なにができてござす。」

と聞くと「せんげの測量でござす。」という

ことはが返ってききました。



それは、長又保の名主で武重、長三郎という人が自分のお金をたし、
 貞亨元年(二六四年)時の領主徳川綱重に工事の許可を得て、本沢
 東沢・小茂谷から流れ出して、いっしょになる大門川の豊ふな水を入門
 の稻荷神社の前から取って古町の仙石原まで八里余(約三十三キロメ
 ル)の水路をつくって水を引き、仙石原外七ヶ所に合計二十町二反歩、
 (約三十二ヘクタール)石高にして二百三十石の新田を開くための測量だった
 のです。

その頃は今のようない精度の高い測量の道具がありませんでした。

けれども水路をつくるためには、レベル測量をどうしてもしなければな
 りません。そのためには夜提灯を使って高低をしらべ設計図
 を作ったのです。

領主から許可を得るためには代官所に何回もかよいました。むかし
の長門町は幕府の将軍が直接治める天領でしたからどんな
ことでも代官所を通じてお願いしなければなりませんでした。

ようやく念願がかなって許可になりましたが許可の条件は非常に
きびしく、もし失敗すれば切腹せよというきついおたっしでした。

大勢の力を雇って、ただちに工事をはじめました。ときには夜まで仕事
をし、三年後の貞享四年の夏ようやく八里(約三十二キロメートル)の堀割
ができてあがりました。けれども途中の水漏れが多く、どうしても古町
の仙石原まで水がゆきません。

さあたいへんです。水がゆかないと長三郎は切腹しなければなり
ません。長三郎は血まなこで水漏れしている所をさがしました。

一番多く水漏れをしている所は新屋部落の小茂沢原というところ

ごろでした。今のようにコンクリートなどはなかった時代でしたから、長
三郎は知恵をしばって畳表をたくさん買って来て、水が漏れている
水路一面に敷きつめ、さらに真綿を少さくちぎって水路に流
しました。

目が細かい畳表に流した真綿がくっつき、水漏れが止まり、水
はひたひたと流れて、ついに古町の仙石原までとどきました。けれ
ども水の量が少く田圃を作ることにはできませんでしたが、水が仙石
原までとどいたのが領主からはなんのおとがめもありませんでした。

その後元禄七年諏訪の鯨波左三郎・作左門という人の応援

を得たり大沢山の紛争で工事が途中で止めなければならなくなつたりしましたが、くじけず仕事を続けました。やはり水が不足してついに事業は失敗に終りました。

けれども長三郎が貞亨元年に工事を始め、宝永元年彼がこの世を去るまで実に二十年、彼の雄大な構想と生涯を仕事に打ちこんだ努力は、長門町の史上にまだ見ることできない大きなものでした。

お話 内田 貞さん

伝蔵 緋荷

むかし長久保宿のはずれに伝蔵とい
う人が住んでいました。伝蔵は合身しかつたが
まじめで働き者でしたから、「伝蔵さん、伝蔵さ
ん」といって、とつてもかわいられていました。



お人よしで働き者の伝蔵に困ったことがひとつありました。
それは、伝蔵がときどき狐に化かされることでした。

今日も朝からうつろな目をして狐のように「コンコン」とな
いてみたり、ピョンピョンはねたりして久津根緋荷様と自分の家を往
ったり来たりしたかと思つたお緋荷様の周りをいくともいくとも
わけのわからないことをつぶやきながらものに取りつかれた

ようにぐるぐるまわっているのです。

近所きんじよの人たちひとがみかねて、「伝蔵さんでんざうどうしただい。」と言って、伝蔵でんざうとだだめて家いえにつれて帰りかえ、その日は無事ぶじに終おわりました。

次の日つぎの朝あさ昨日きのうのことが心配しんぱいになった近所きんじよの人たちがおそろるおそろる「伝蔵さん、おはようござす。」と、声をかけると、中なかから、「朝早くからだれでござす。」と、伝蔵さんの元気げんきな声が帰かえって来きました。

みんながホカンとしていると、伝蔵でんざうの家の玄関げんかんの戸とが中なかからガラッとあいて「やあみなさんおそろいで、なんかありやしたか……」まし



めでお人よしの伝蔵さんの柔和にゅうわな笑顔えがをみてみんなほっとしました。

「きんははどうしただい。」一人ひとりが声を掛かけると、わしきんは、なんかしやしたかい……」伝蔵さんは昨日きのうのごきごきは全くまじ知らないようです。

お人よしでまじめな伝蔵さんの顔かほをみると近所きんじよの人たちも昨日きのうのごきごきをどうしても聞く気きになれません「伝蔵さんが元気げんきでやってりやあいいわい。」近所きんじよの人たちはそくさと伝蔵の家いえから立ち去さりました。

そんなことがたびたびありました。「どうもおかしい。ただじゃあねえぞ。狐きつねがついているじゃあねえかなあ……」一人ひとりが言いいたすと「そうだそうだ。それに相違さういねえ。」みんながそう思おもっていました。

みんなが集あまる伝蔵でんざうについて狐きつね払いはらいをすることになりました。

それには長久保宿ながひさほしのはずれ東山ひがしやまのふもとにお祭りまつりしてある久津根

稲荷様にお願ひするのが一番よいということに話が決まりました。
 ボタ餅を作りました。厚い油揚げもたくさん作ってお稲荷様に
 供え神主さんをお願ひし、お稲荷様の前で伝蔵をまん中にして、
 「狐はお稲荷様のお使いだと聞いています。どうかまじめにお人
 よしの伝蔵のからだから狐を取ってください。」とみんなでお願ひし、
 神主さんにお払いをしてもらいました。

あらたかな久津根稲荷様のこりやくがたちまち現われ、
 それ以来伝蔵は狐に化かされることなく、だれがいうと
 もなく久津根稲荷という呼び名のほかに伝蔵稲荷と呼ぶよ
 うになりました。

お話 中原超さん

境引き

信州のように四方が山で囲まれている国では普通郡と郡の境な
 どは、分水嶺になっている所や山の尾根、谷間を流れている川など、自
 然的環境にしたがって境ができています。

ところが茅野市・小県郡・北佐久郡の境となっている蓼科山北西斜
 面の境は、必ずしも自然的環境と一致していません。

大門峠に接する白樺湖のあるところは、むかしから池の平と呼ばれ
 当然茅野市(旧北山村)に属していると多くの人は考えていますが
 実は、その大部分は北佐久郡立科町の地籍になっています。

小県の方から見ても、大門川の支流本沢川は、その源流が蓼科山
 の北西の斜面にあり、蓼科山の一部を合めて当然に長門町の地籍が

あるように思える場所です。

「ですからこの地域は近世になっても境界の争論が絶えず、小諸諏訪両藩の「巢鷹山であった関係もあって、どうしても決らず、寛永以後も小諸領の八ヶ村と諏訪領の九ヶ村の間に、いわゆる「蓼科山境論」が起っています。」

こんなことがなんどか、くり返されていましたが、さうぱり結論が
ごません。

「おめえたや、おらあがなんぼ考えたって
決るこつちやあねえ。こりやあ国で一番考え
れえ殿様だちに話し合ってもらうより
ほかにみちはあるめえ……。」



佐久の人たちはこう考えていました。不田心議なもので諏訪の
人たちも同じことを考えていました。「ほうほうけい、やい(君)たちもそう
考げいていたけえ……。」

こんなようですから両方の殿様は領民の意見を取りあげ
ないわけにはゆきませんでした。早速小諸と諏訪の殿様が話
合った結果、日を決めて一番鳥がなくのを合図に、西方の殿様
が同時に城を出て、出会ったところを境にすると約束しました。

約束の日がやってきました。小諸の殿様はこの日のために数日
前から準備をし、前の晩も早くやすみ一番鳥の鳴くのを待
っていたように城を出発しました。

一方諏訪の殿様は、前の晩おそくまでおきていましたから、

ついお寝坊をしまして、起きたとき日はすでに東の山から顔を
を出していました。つまり諏訪の殿様は、小諸の殿様よりず
っとおくれて城を出たわけです。

そのため、両方の殿様が出会ったところは、大門峠でした。こ
すから、境は小諸と諏訪の中間ではなく、
ずっと諏訪の方へよってしまい、約束と
ありそこが境となりました。



お話 羽田作平先生



昇竜の穴

むかし蓼科山しなやまのふもとに近い山奥の部落
に、いわな釣りがとくいなおじいさんが住んでいま
した。今日も朝暗あせくらうちに家まで行って、いつものよ
うに本沢の霧がふちまでやってきました。

霧がふちは二段になった滝が落下し、周囲の岩にぶつかり霧
となり数枚の畳を敷きつめたような平らな岩のうえに降り、大
木におおわれ、ものすごいかんじのする所でした。

釣干つりがみをついたおじいさんは、いつものように本沢の道から霧がふ
ちにはいろいろとしました。滝から降りそそぐ霧といっしょに
冷たい強風がビューと吹き抜けると、どうしたことがおじいさん

の体は釘付にされたようになり、頭の先から足の先まで氷のよ
うに冷えきって、ものをいうこともできません。

体が倒れそうになるのが両足をふん張ってこらえ、前の方を見
ると滝つぼの水面から大きな頭を持ちあげた竜が、おじいさんに
向かって大きな口をカアーと開き、冷めた息を吹きかけていました。

あまりの恐ろしさに顔を両手でおお
いその場にうすくまっしてしまい、気が遠
くなりそのまま、その場に倒れしま
いました。

それからどのくらい過ぎたことか
ようか……ふと気がついたときは大木



の合間から淡い光がさし込んで、滝つぼには虹の橋がかかっ
ていました。恐る恐るあたりを見回しましたが、竜の次女はどこにも
ありません

ふしぎなことに付近の平らな岩に直径三十センチメートル深
さ五十センチメートルもあるうず巻きのような穴があります。
「竜の昇天だ」思わずおじいさんは大声で叫んでしまいました。

むかしから陽気の良い年は、水中にひそむ竜が天に昇ると伝
えられ、そのときにできる穴を「竜ずり」と呼んでいました。竜ず
りの穴は大きなもので直径三十センチメートル、小さなものでも十五セ
ンチメートル、深さは六十センチメートルから四十五センチメートルにし
た。

こんな穴が七八個、つらなるように平らな岩についでいます。
 竜ずりの穴はお天気を判断し、穴に湿気があるときは雨、乾
 いているときは晴でした。おじいさんは毎日観察していましたか
 ら釣りの名人ばかりでなくお天気博士ごとあつていました。「おじ
 いさん今日は雨降らぬえない」と聞きにゆくと、「今日は降りや
 すぞ」といって、いつも村人たちにしん
 せつにお天気を教えてくれましたか
 ら、村人にちから、とつてもだいに
 にされました。



お話 柳沢新次さん

滝の宮権現



町からはニキロメートルほど東にある滝の沢の部落は、
 四方が山々に囲まれ、段々続きの畑や田圃の開けたとこ
 ろですが、夕日をいっぱい受けて、むかしからたくさんお
 米が取れ、しかも質のよいお米でしたから、山に囲まれた部落でした
 がとても住みよい部落でした。

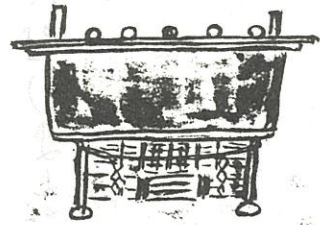
それというのも、部落の山腹にはぽっかりあいた岩穴から、きれいな
 水がとうとうと流れ出し、飲み水にしたり、畑や田圃をうるおし
 ていたからです。

静かて平和なこの部落に、ある日とつぜんたいへんなことが
 起りました。ほら穴から流れだしていた水がだんだん少なくな

なつてきました。どうにか田植えを終ったものの田植え休みどころでは
ありません。せつかく植えた田圃は、がらからにひあがってしまい、
まごまごしている、飲み水にも困るしまつてです。

いつもの滝の沢は水に恵まれすぎると道路が水を流
れる小川を用水にして、飲み水をはじめ食器類、なべやおかま洗い
洗濯ものからお風呂に至るまで今の水道のように、なに不自由な
く利用していましたが、いったん水が不足するとそのあわてようは、
はた目からみると、きのどくのごようでした。家と水源を行ったり
来たり、そわそわするばかりでした。

気の早い人は、部落を捨てて、引越すといひ出す人もいて、治
りがつきません。いつも水をそまつにするから水神様のたたりだとさ



わぎたてる人もでて、家々では、神棚にお燈
明をあげて、「どうか水がでますように」とお祈
りする家が多くなってきました。もうこうする
よりほかに方法がありません。

そんな日が三日も続き、みんな疲れきって家にとじこもって
いました。六月もすでに未を迎えようとする二十四日のひるさがり
頃です家の外で「ワー」という、人声がかかります。人々が「何ごと
だろう。」と思つて、家の外に飛びだしました。

どうしたことでしょう。今まで少なかった道路の水路はな
みなみと水があふれ、道いっぱいになり、なべやおかままで流れ

出しています。

「これは、きつと水神様のごりやくにちげえねえ……。」と、口々にさげびよろこびました。

それくらい、みんながとつても水をだいにするようになり、岩穴の前には、水の神様の「滝の宮権現」が祭られ、水がたくさん溢れ、六月二十四日には、村中でお祭りがあはれられるようになりました。

お話故金子準作さん

鳥羽山の古狐

むかし長門町と丸子町の境にある鳥羽山という山に、狐の先が三十センチメートルほど白い狐が住んでいました。狐は、鳥羽山を中心に滝の沢や仙石原まで行動した。また、人を化かしていました。

ある人は、滝の沢から佐久の親戚に行こうとして、昼食をすまして家を出しましたが、仙石原で化かされ、半日中道に迷って暗くなつてから、やっと自分の家にとりつき、その日は親戚に行くことができませんでした。

また、旅に出ようとして朝早く家を出たのに、昼過ぎの頃、浦山で「オーイオーイ」とその人の声がするので、近所の人々が

けつりてみると、自分のゆく道がわからなくて助けを求めたりしています。亡心れた頃になるとまただれかが化かされます。ひどいときは鉄砲を持っている狩人まで化かすこともありました。「なんとか古狐を退治しなきゃあー!」

こんな声が村人から聞かれるようになりました。みんながそれぞれわなを掛けてみたり、毒を油揚げの中に仕込んで仕掛けたりしましたが狐はしらん顔で振り向いてもみませんでした。

こうをにやした村人たちは村中で狐狩りをするにしました。木蔭や

草むらの中にひそんでいる古狐を追いかけて、鉄砲で仕とめようというのです。



狐を追いつめて仕とめる場所は、広々とした仙石原と決まりました。せこといって狐を追出す役や、追い出された獲物を待ちかまえていて鉄砲で仕とめるたつのふた手に分かれて狐狩りをはじめました。「こんだっこさ古狐の野郎もおたふつたわい!」……

みんな意気込んでいますから「ホイホイホイ」と狐を追出す掛声も一層高くなりまわりの山々にこだましました。すると草むらの一隅がばさばさと揺れて、大きなしっぽの先の白い狐が飛び出しました。「それ出た!」みんなが大声をあげると飛びだした狐は、狐を追出す役の大勢いるせこの方に向かっつまっしぐらに走りだし、あつという間にせことせこの間を走り抜けて、ゆくえをくらましてしまいました。

全くたちの悪い古狐です。みんな気抜けして、もう手の打ちようがなくなつてしまいました。

それからしばらくたつてからのことですが、数十人のわんぱく盛りの子供たちの集団が遊びつかれて仙石原の方から岡木の部落をとり、家に帰ろうとして滝の沢の部落を過ると、家々で飼っている犬が子供に向かつて一斉にはえだしました。すると集団の中にいた一人の子供が、いま来た道をまっしぐらにかげだしました。みんながあつけに取られていると犬に追われた子供は四つんばいになつて走つたりして山の中に走りこんでしまいました。

それはほんの一瞬のごきごきで、子供らは、顔を見合わせていまし

ました。が仲間の一人がいなくなつているのに気づいて大さわぎになりました。秋の日は短かく日は西の山にとっぷりと沈み、あたりはうす暗くなつてきました。

さあたいへんです。村の人々はたい松を持ち出し、付近の山々を徹夜で探し

ましたがそのかいもなく子供の次女はどこにも見当りません。いちど家にもどつて、朝めしをすませて出なあすことにしました。

徹夜の探策ですっかりつかれた一同が朝食を済ませて再び探しに出ようとすると、十数キロメートルも離れた隣り村



の山中で、子供が見つかったという連絡がきました。

「いったいどうなったずら。」とみんなが心配して、知らせに来た

人の話を聞いてみると、子供は疲れているだけで元気だったが、

夜露でぬれた着物には、白と茶色の狐の毛が一面につき、子供

が見つかったあたりの地面には、動物の血がてんと落ち、

狐の毛がいっぱい抜けて散っていたというお話でした。

こんなさわぎがあった。それ以後は、しっぽの白い狐を見た

村人はなく化かされたという人もいなくなりました。

お話 故 金子準作さん

戸隠しさま



むかし大門のほぼまんなかの山石下に、ひとつの衆

落がありました。これ木川に添って、合リ、発展した

のが、小吹とって、今の空城部落です。もうひとつは、

戸陰沢川に添って移転したのが、宮の上の部落です。つまり、きれいな水の流

れに添って、むかしひとつだった部落が、東台地の川に添って、発展したものです。

戸陰沢川の水量はなかなかほうふご源流は遠く雨境や大石平の

沢にありました。が、宮の上の部落は水に恵まれ、いまは、これ木

川の水量はすくなく、これ木沢の南には、宮城という大きな沢がある

のに、すこしも水がありません。

水がありやあなあ…俺らあの部落の台地にも田圃作れるたがなあ…

そんなことを話し合いなから小吹の人たちは今日も馬を引いて宮城の奥にある水無しの沢に草刈りにごかけました。水のない所なのでみんなが水無しの沢と呼んでいました。

水無しとはいつでも東山の中ふくにある男女杉の根本からは、にじみ出るようなわずかな水があり穴を掘ってためると人や馬が飲むのに困るようなことはありませんでした。

「ここんとこへうんと水がでねかなあ。草刈りの手を休めてついでちがでます。そのうちに村のひとりがいました。「ここへ水神様をお祭りしたらどんなもんずら。」 「こりやあいい考えた。」みんなこぞって拜成しました。

そこで水の神様の戸隠神社をお祭りすることにしました。

部落の人たちはみんなでお金をだし合って

戸隠様をお祭りするほくらを作っても

らいました。小さなほくらですが村中の人たちの

願いがこめられています。作ってもらったほ

くらを馬の背に乗せて村中でのいつもの水飲み

場に行って来ました。神主さんをお願いして神事も行ないました。

無事にご神事がすみ山をくだらうとしたときです。杉の根本が

らにじみ出るほどしかでなかった水が多に水かさが増え、水止めしてあったせきを押して切って、きれいな清水がひたひたと流れだし、ついにここう音をたてて流れだしました。



おかげで部落の東台地にある宮城沢は開田され、窪城の部



不聞どうろく神

中仙道の長久保宿の人たちは、いろいろな願いを
ことを町はずれの道祖神様にお願ひする羽わし
があつて、「どうろくじん様」と呼んでいました。

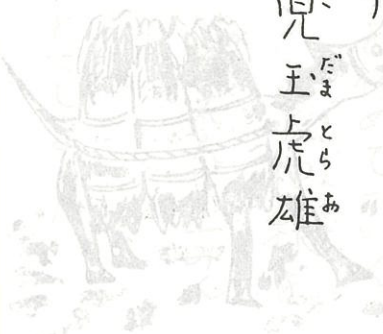
「どうろくじん様」は、麻着や疫病が町にはいり
こまないように、町の入口でおさえこんでしまつたり、
追い払つてくれるし、旅人の道案内もしてくれ
るので、幸福の神様だと信じていました。

ですから、お祭りがある二月にはいると、家々ではお祭りに使
う藁馬を作つたり、お萩餅を搗くために餅米も用意しました。
山国の二月は、とても厳しい寒いときですが、農閑期なので、今

落は豊かごとも住みよい村になりました。ふしぎなもので今
までは水に恵まれていた隣りの宮の上部落の中を流れていた
アサ陰沢川の水量はずつとすくなくなつてしまつたと伝えられ
ています。

今でも部落では区長さんが音頭を取つて一番水の不足す
る土用の頃きれいな水の流れたすゝ隠様をお祭りしてある
はこらの前で毎年お祭りがあこなわれています。

お話故児 玉虎雄



日も数人の人達が寄り集まって、いろりを囲み、よもやま話にふけていました。

「今年はおらいちの娘も、いい縁談があるかも知れやせんぞ……」
 「そうだな。今年、朝早かつたない。お詣りにいったじゅうじゃあ一番早かつら……」人々の会話には、ほのほのとした暖かさが感じられます。

道祖神のお祭りは二月八日。その日は朝早く起きてお萩餅を作り、道祖神様にお詣りし、道祖神様の顔にお餅のあんこを塗ると良縁が得られるという風習がありました。

「ところでさあ、おらあ困っているだわい、孫の耳がふさがっちゃて聞けえねだわい、どうすりゃあいいずらない。」と、一人のおじいさんがなやみごとを打ちあげました。三、四人集まると楽しい話に続いてなやみごともあります。

「どうだい、どうろくじん様にたのんごみたら……」仲間の一人がこんなことをいいたすと、合わせた人々は、「それがいいぞい、そうしてみんし……」と、みんな賛賛成しました。

おじいさんは、ものは試したと思、町から一五キロメートルも離れている道祖神様に、「どうが孫の耳を治してください。」と、雪の降る日も、つめたい風の吹く日も欠かさずにお詣りを続けました。



41 不聞どうろく神

一か月が過ぎ、二か月が過ぎても、おじいさんの道祖神詣りは続けられ、延べ百日になろうとしたある日のこと。今日も朝早く起きて、お天気が良い日でしたから孫の手を引き、いつものようにお

詣りませませて家に帰ろうとしました。

その日は良いお天気だったのに、南の空がにわかにくもりピカピカとすすむと「せん光と」コロコロコロと耳をつんざくようなものすごい雷の音がなり響きました。あまりの決心ろしさにおじいさんも孫もその場に倒れ込んでしまいました。

それからどのくらいたったことでしょうか……夕立がやんでさわやかな初夏の涼風が倒れているおじいさんの顔にあたり、ようやく正気にもどり、うつろなまなこで起きあがると、かけの下を流れている依田川には七色の虹の橋がかかっていました。

おじいさんははつとして、そばに倒れている孫をたき起すを孫もようやく気がつき「ごっけい雷の音あつかねえ。」といっておじいさん

のひざにすがりつきました。

おじいさんはとびあがって喜びました。今まで聞えなかった孫の耳が聞こえるようになったのです。うれしくこうれしくてたまりません。なんとかお礼をしたい。ごもうちはお金なくお金がない。いろいろ考えたすえ、家ご一番たいしにしていた家宝のお椀をお礼にさしあげることにしました。

おじいさんは家の空にしていたお椀が、人の耳のように思えてなりませんでした。耳の穴がつまりて聞えなかったと思っていましたか



ら聞こえるようになったのは、もとのように耳に穴があったのだと信じ、お椀の底に穴をあけ、ひもを通し、さしあげることにしました。「どうろくじん様。ほん

とうにありがとうごわした。」とお椀を供えて、こいねいにお礼のお詣りをしました。

これが町中の評判になり、隣り村の大門や和田古町のほうからもお詣りに来る人がふえて有名になり、耳の病気がある人にとてもごりやくがあるということ、普通の言葉とは反対の言葉で、「不聞どうろくじん」と呼ばれるようになりました。

普通の言葉と反対の言葉が使われるようになったのは、戦国時代の名将武田信玄が敵をあざむくために使った言葉ですが、うそをつくために使われた言葉が、長い間にほんとうの言葉のようになってしまい、「不聞どうろくじん」の「不聞」というのもそのひとつです。

お話 故長谷川虎次郎さん
坂西 角 春 治さん

清水坂の狐

大門川と和田川が、いつしよになると依田川になります。このあたりにひとりのおじさんが住んでいました。おじさんは魚取りの名人で、きれいで冷たい水によくそだつ岩魚を捕るのが大好きで、綱打や釣りにたびたび出かけました。

小雨がしよばしよばと降る日に、夜になるのを待って今日も、大門川の上流に向かて綱打ちにでかけました。長年の経験で、その日は、おもしろいように魚が捕れました。

綱を打ったびに魚が捕れるのでおじさんは、ときどきのもわすれて魚を続けました。三喜米ほど上流の入大門という部落のあるところにきたときは、千一持にぶつて、いました。

「今日は大漁だったしぼつぼつ帰ろう。」と網をたたんで
 大門街道にでると、家の方角に向かつていそぎました。おじいさ
 んは暗い夜でも大門川や大門街道は毎日あるいていますから、
 自分の家の庭のようによく知っていて、道に迷うようなことは
 ありませんでした。

入大門の部落を過ぎると隣りの窪城部落までは一キロメートル
 ばかりあります。この部落と部落の
 間には「清水の坂」という坂がありました。
 むかしの清水の坂は急な坂道で道の
 中もせまくうっそうとした木木が繁
 り、ひるでもうす暗くたまたま古狐が出



ぼつし、人が化かされるいやなところでした。

ある人は暗くなつてここを通り、家に帰ると、いつのまにか、すっぱ
 だかにされ、フンドシひとつになっていた。ほかの人は、入大門の親せきには
 た餅を届けに行ったら、重箱の中の餅は、馬の糞に変わっていたり、油揚
 げや稲荷ずしもたまたまさらわれるなど、うわさの多い場所でした。

その夜は小雨が降り、うす気味が悪く、なんとなくいやな予感がしま
 した。おじいさんは、いそいで通り抜けようと思いました。ところがふしぎ
 なことにおじいさんが帰ろうとする道がスーとやみの中に吸い
 こまれるように消えて、帰る道がなくなつてしまいました。

そして、ほゆるい風がサーと吹き抜け、繁った木木の葉がざわ
 めき、小雨の露をたっぷり含んだ木の葉から落ちる雨の音におじ

いさんは両手で耳をおおいた程のおそろしい気持ちになりました。
「はてな……狐の仕業かもしんねえぞ。」

おじいさんはとっさに、「こんなことを考え、腰にさしていたたばこ入れ
を取りだし、道ばたに腰をおろし一服つけながら、自分のあせる心を
あさえ、「この古狐め。悪さばかりしやあかって。この綱で生捕りに
してくれるわ。」とはかり、ざわめく木立の下をじっとにらみつけました。

すると不意議なことに、今まで消えてしまっていた見えなかつた道が、
ポーとかすくで見えてきました。「古狐め。俺の気力に圧倒され
て逃げ出しゃがった。」と思ひこみ、そのまゝ家路をいそぎました。

ようやく家にたどりついた頃は、すでに東の空はしらみはじめ
ていました。無事に家に着くと、きゆに疲れがどつと出て、ねむく

なってきました。道具を土間に投げだしなにはともあれひと
と眠りすることにしました。

ひと眠りしたおじいさんは、いそりに火をいれ、大漁だった
魚を料理しようと思ひ、包丁を取り出し、土間に置いてあった
びくに手をかけたおじいさんは、思わず、「あつ。」と敬馬きの声を
あげました。

ずっしりと重いはずのびくは軽々

で、びくの中には一匹の魚もは入っていませんでした。戸にかぎを掛けてねた
から、猫に取られるはずはありません。ど
う考えても、狐に、魚を取られたとし



か考えられませんでした。それ以来、おじいさんの腹の虫はどうしても治まりません。夜網に出るたびごとに、「清水の坂」と通りましたので、今度こそ狐を捕まえようと気をつけていましたが、古狐は、ついにおじいさんの前には、再び現れませんでした。

お話 相馬 音次さん

「奥の院武の宮」と信玄杉



武田信玄がもちいた「風林火山」の旗印は「疾きこと風の如く、徐かなること木の如く、侵掠すること火の如く、動かさること山の如し」という中国の孫子の言葉ですが、これほど戦国武将の生活と意見をぴったりにあらわした言葉は、ほかにはありません。

「風林火山」の旗を押したて信州に攻め入り諏訪郡をあとし、小島郡をおさえて、川中島に軍を進めようとして天文十一年十月七日甲州を出発し、諏訪の葛窪に三日帯在し、さらに大門峠のふもと諏訪の湯川に三日帯在し、さらに十二日大門

諏訪の湯川まで引きあげた信玄は、ここで軍備をととのえ、翌十二年九月再び長窪に攻め入り九月十九日に長窪城を攻め落とし、長窪城を基地として、武石城や和田城を攻め落とし、さらに塩田方面の村上軍と戦い、川中島合戦の前営基地として、長窪城を利用しました。

それからずつとのちのことですが

信玄が戦いに勝つように飯綱明神の神前に奉納された鎬矢という弓の矢を「御神体」にし、奥の院にお祭りしたので「奥の院武の宮」と呼ばれ



峠を越え、入大門に兵を進め入大門にも三日間滞在しました。大門峠からくると、入大門の入口にあたる丸岩の地蔵には、部落の人たちが氏神とした飯綱明神が祭られていました。(このお宮はのちに稲荷神社になります。) 信玄は入大門に滞在のとき、「飯綱明神さま。どうか川中島の戦には勝利をわれに与えてください。」と神前に鎬矢という弓の矢を奉納してお祈りしました。さらに信玄は、二本の杉を自らの手でお宮の境内に植樹しこれも奉納しました。

そして十五日に入大門を出発し、四泊を通過して長窪に進み長窪城下の民家に火をつけるなどしてゲリラ戦を行ない、長窪城は攻めないでそのまま諏訪の湯川に引きあげました。

るようになり、今のお稲荷さまの浦山に新しく石のお宮が作られました。

また、今のお稲荷さまの境内には、ふたかかえもある二本の大きな杉が仲よく立ちならんでいます。武田信玄が手植えした杉ということで村人から「信玄杉」と呼ばれ、したしまれ、今もだいにされています。

お話故 児玉司農武さん

千人塚

天文十二年九月、長窪城を攻め落とし、完全に長窪城を手中に収めた武田信玄は、長窪城を基地として、まず周辺の武石城や和田城を攻め落とし、さらに塩田平方面で村上軍と合戦し、川中島合戦の前衛基地として長窪城をおおいに活用しました。

天文十三年には、急ぎ大甲峠より出陣し、小原地方の中心部上田原で村上軍と合戦しましたが、このときは強力な村上軍の反撃にあい、さすがの武田勢も大敗しました。

敗戦が続いていた小原・佐久の連合軍にしてみれば、これを機会

55 千人塚

に、小原・佐久方面から武田軍を退散したいと考え、長窪城を奪取し

かえそうとして、腰越村(丸子町)に勢力を結集し、深山を経て長窪城をめざして兵を進めました。

はやくもこれを察知した武田勢も、長窪城から出陣し、五反田、滝の沢を経て、滝の沢の北部一キロメートルほどの地点に布陣しました。武田勢も上田原合戦の大敗をばん回するのに絶好の機会でした。

両軍しばらく対峙していましたが武田軍から攻撃に移りました。深山に布陣した小泉・佐久の連合軍もこれに対抗、両軍入り乱れたの大激戦となりました。

激戦すること数時間、両軍とも優劣が決まらないうちに、兵を引きあげました。双方の戦死者はあわせて千人にたつていました。

文字どおり刀折れ矢尽き、戦の跡には、大勢の兵エが、あすこにも、こにも、あり重なって、沢や谷間の各所に、見るもむざんな次女で散らばっていました。

戦いが終わり、両軍千人に及ぶ

戦死者とねんころにほうむり、

平とするために、長窪村と腰

越村の山境に直径三十メートル

高さハメートルもある大きな塚

を築き、供養しました。それ

以来この地名をみんなが、千

人塚と呼ぶようになり、また



その付近に残っている地名も陣上「的沢」陣居「勝負沢」と呼ばれるようになりました。

むかしはこの付近の畑から刀の折れたものなどがたまに出土したものだと言われています。

お話 城内袈裟人さん

このお話のほか、南北朝時代の戦乱の名ゴリとして戦に閑係のある地名が残っているという説もあります。

名主争いと村わかれ

むかしの長門町は天領といって幕府が支配していました。天領になったのは元禄十四年(一七二七年)で、それ以来明治維新を迎えるまで百七十年間、四十二代の代官によって支配されました。

その頃の村の行政組織は、村方三役といって今の村長にあたる名主、助役職にあたる組頭と、村会議員のような役を勤めた百姓代がありました。名主の役は、はじめは世襲といって特定の家で代々勤めていましたが、のちには入札といって村中の百姓が投票をして最高得票者が勤めるようになりました。

けれども入札の制度がスムーズにわたしたちの生活にとけこんだわけにはありません。むかしの大町では文化六年(一八六九年)に始めて名主の

入札に村中の百姓が参加しておこなわれましたが、それがもとで、上大門と下大門に分れつして二つの村になつてしまいました。

それは、大門村の名主をしていた喜兵衛という人が家出をしてしまひ、ゆくえがわからなくなつてしまつたので、組頭を勤めていた金弥という人が先きだちて村役十二名が連印して中之条の大官所へ名主役の後任をきめる申したことをしました。

このときは、すでに上大門と下大門の対立は、相当進んでいましたし、名主の後任をめぐる争いが口火となりました。こんなときは、垂心いことがかざるもので、下大門宮の上の光明院という人が下大門にお寺を作ろつとして運動してましたので、常福寺を持つてゐる上大門の人たちをますますしげきして政争にまで発展し、村はじまつ

て以来の騒ぎになつてしまいました。

こんな騒ぎがなかなか治まらないので、長窪古町の名主與五左門と茂左門という人が調定役をかつて、村役の人々となん回も話し合ひを重ねた結果、これからの名主は入札つまり選挙によつて決めることになりました。

さうそく選挙が行なわれることになり、上大門からは年寄の半左門、下大門からは組頭の金弥の両名が立候補しました。いよいよ投票がすみ

開票の結果金弥七十三票半左門七十一票でわずかに二票の差で下大門



がおした金弥が名主と決まりました。

ところが半左門を推せんした上大門はこれが不満で「むかしから大門の本郷はあらあほうだし、支郷なんかで名主やってもらったことあねえ」 「なんぼ入札で勝ったからこへハニヤにもなる老ぼれに勤まりっこねえわさ。」 「岩井組と四泊組の組頭をかねていたとき平だから岩井組だけにしてくれって、いふから四泊組はあたりしく作左門と京助を組頭にしたもの、無理して下大門で押すんことんでもねえ…」 「さんざんあくたれ口をならべ、しまには訴訟を起こしました。」

金弥を推せんした下大門も負けてはいません 「はじめからきめといたことじゃあねえか、なにが本郷だ、よく考えろ、石高は、すくねえし税金だってあらあほうがずと多いわ…」 「…」 といつてこの年の四月にこれ

を受け、忘訴したので大門は二にわかれて、訴訟に発展してしまいました。

そのため中之条の代官所は、所在地中之条村の瀬左門と宇吉、小原郡辰の口村の名主源五門、植科郡金井村の年寄茂吉の四人に、このもめごとの扱いをまかせました。

もめごとの扱いをまかせられた罌

は調定にのりだし仲裁の努力を

重ね、その結果、上大門と下大門の

石高を別にし、村で必要な宗門帳

や、五人組帳、夫餞帳などは、別

に作る。名主、組頭、百姓代の村

方三役もそれぞれ上大門と下大門



提出状訴



に、別に作るというところで話がまとまりました。

これによつて今までひとつの村であった大門村は、完全に上大門、下大門にわかれて新しく出発し、文化六己年（一八七四年）十月以降明治維新を迎えるまで六〇斗もの長いあいだ、別の村として、それぞれ独自の道とあゆむことになりました。

お話 内田 貞さん

筆よしの沢

大門峠から四キロメートルほど北に大門街道をくたると追分を経て、仏岩と外山にはさまれた、せまい谷にございます。このせまい谷間を縫って大門川と大門街道が南北に走っています。

北からみると三角に尖ってみえる外山は、すそを北に長く引いて、広原と呼ばれるあたりまで延びています。

このすそのあたりをむかしは、遠山と呼んでいました。武田信玄が川中島出陣のため大部隊をひきいて、何回も往復し、また休息したと伝えられるところですよ。ここにはむかしから普通通のよしとちがって、竹によく似たよし、が十五本から二十本、自生し、毎年すくすくと育つていました。

大勢の家来をしたがえて、ここまで来た信玄は全員に休息の命令をだし、みずからも休息しようと思いました。ふと思いつき、休息のあいだを利用して甲州に残してきた家族に手紙を書こうと思ひ、天たこを取りだしましたが、入れおいたはずの筆がありません。しまったと思ひながらあたりを見回すと、道端のよしに気がつきました。信玄はこのよしを取って墨を含ませ、筆のかわりにし、スラスラ……と手紙を書きました。よしの軸は軽く字が書きよいので、信玄はそれからこのよしを、筆の軸にして愛用しました。

信玄がよしの軸を筆の軸に利用するようになったので、それ以来土地の人はこの沢のことを筆の軸になるよしのある沢」ということで「筆よしの沢」と呼ぶようになりました。

お話 柳沢周平さん

広原の峰

信州は高い山波に囲まれて峠が多く、五百以上の峠があるといわれ、日本一峠の多いところ。山波で分断されていますから隣の町へゆくにも、どうしても峠を越さなければなりません。大門峠もそのひとつでした。この峠は古代から中世近世に至るまで、信州の重要な道として利用されてきました。

近世になると、徳川幕府によって中山道が開かれ、小県郡と諏訪郡を結ぶ本道ありは、和田峠になりましたが、和田峠と谷ちがいにある大門峠のほうが、ずっとなだらかでしたから、普通の人が旅をするときや、荷物を宿から宿に継ぐときは、大門峠を多く利用しましたから、脇街道として、けっこう繁栄しようしま

した。

その頃は継立てといつて、古町や長久保方面から来る荷物は、入門の宿でつみ替え、人は馬やかごに乗り替目えてもらい、大門峠を越えて、諏訪の湯川まで送りました。

「お客さんかごごとうでござす。」いっけんお人よしに見えるかごかきの男が、今日も旅人をさそいこみ、ちようしのよい口調で世間話をしながら、小茂が谷の部落までやってきました。

大門街道もこのへんから急な坂道が多くなり乗ったかごがはげしく左右にゆらくゆれ、ずいぶん長い道のように感ずる所でした。小茂が谷の部落をすぎ、道も西山のふもとに添って進むと、谷あいの向うに扇のようにひらけた広原の段丘にさしかか

りました。

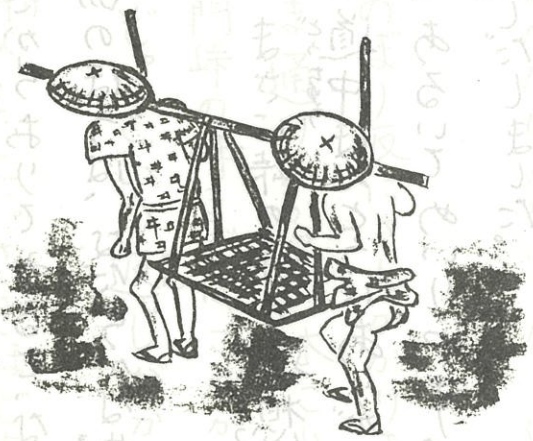
段丘の東の目下には、奇岩が箱庭のように起立し、春はつじ、夏は青葉と白樺、秋は紅葉の名所として知られ、丘のうえには「強清水」と呼ばれる清涼な泉があり、道もなだらかになるので、旅人が乗っているかごもゆれがす

くなくなり、「よいさ、こらさ、よこや、こらさ」と、かご屋さんのかけ声がい

気味よく感じ、ゆりかごに乗っているようになり、思わずうとうとする

まに、丘の峰につきました。

「お客さん峰でござす。」かご屋



さんの威勢力のよい声で旅人がかごからおりてみると、なるほど峰で旅人がゆこうとする諏訪のほうは、なだらかな曲線にくだりになっています。

はじめに大門峠の旅をす人は、まさに峠の峰を連想させる場所でした。「かご屋さん、なぜ道中ほんとうにありがたうございました。ここからはくだりだごあるいてめいりやす。これはだちんです。」とお金を差しだしました。

かご屋はお金を受け取るとあいそよく、「道中はじゆうぶん気をつけておゆきなすって。」というが早いか、旅人がおりて空になつたかごを二人でひっかけると、もと来た道を早かごのように「えっほう、えっほう」とかけ声をだして走りだし、たちまち

広原から次女を消してしまいました。

「気の早いかご屋さんがあったもんだ。」とつぶやきながら、つめたい強清の水をぐつと飲みほした旅人は、思わずひとりわらいをしながら、ひと休みするとなだらかなくだり道をすたすたとあるきはじめました。

仏岩のあたりまで来ると、再びのぼり坂にさしかかりました。ふしぎに思った旅人は、たまたま通りかかった木こりのおじいさんに道をたずねると、「大門峠の峰まではこれから二里半(六キロメートル)もありやすぞ。」という返しがかえつて来ました。

旅人は思わず「しまった。」と叫びました。さきほどのかご

屋に払ったお金は大門峠までの料金だったからです。旅人はしばらく考えこんでいましたが、気を取りもどして大門峠に向かって旅を続けてゆきました。

お話故児 玉虎雄

Handwritten notes in the right margin, including the title '宝の石棒' and other illegible text.

宝の石棒

文化年間といいますが今から百

六七十年も前のお話です。

大門神社秋宮の東台地に当る明神林

というところの山ふもとを、畑にしようとして

数人の人が開闢をはじめました。

みんなが力を併せるとおもしろいように仕事が進み、思わず

鼻うたさえて、鋤をふるう手に、ますます力がはいりました。

力いっぱい大地に鋤を打ちこむと、カチッ、カチッ、と鋤がなにかに当たりました。

なんだろうと思って回りの土を取り除くと、長さ一メートル



縄文中期の土器

加曾利

直径十五センチメートルもあるだ円形の石の棒のようなものがでてきました。

「こりやあーいったい、なんずら。」

「雷さまが使った石のつちだつぞ……。」

「そうじゃあーあるめえ。戦のとき使った軍器(道具)ずら……。」

いろんな説が伝(つ)びだしましたが、ついなんだかわからず石器時代のものに間違(まちが)いないということだけわかりました。

そこで、村の物知りじいさんに聞くことにしました。物知りじ

いさんの話によると、大門

神社の秋宮はもとはこの



宝物の石棒

「明神林」にあったと伝えられていて、このような石棒は、遠い神代の時代に、先住民が祈りなどをささげるためのひとつの目標で、われわれが祖先とすう拝するときに、「お位はい」を作ったようなもので、むかしから神さまなどのあるところからごるといってお話でした。

「そんねにでいじなもんなら、昔のお宮のつからでたもんだし、お宮の宝物にしようじゃあーねえか。」ひとりがこんなことをいいたすと、「それがいい、それがいい。」と、みんなが賛成したので、大門神社秘蔵の宝物にしました。

この石棒は、今でもお宮の宝物として、大門神社秋宮の宝

物として宝蔵庫にりっぱに保管されています。



石器がたくさん掘りだされ、町の教育委員会に保管されています。

お話 故 児玉司農武さん

峠の茶屋

近世になって五つの重要な街道が徳川幕府によって作られました。わたしたちの町を通ったのは「なかせんどう」でした。はじめは「なかせんどう」のまんなかの「せん」という字は、にんべんに山という字を書いています。幕府の命により正徳六年すなわち享保元年（一七二六）から山と言う字を書いて「せん」と読ませるようになりましたので、「なかやまみち」と書いて中山道と言ったようになりました。

東海道に次ぐ重要な街道ですから、公用の旅行者や参勤交代の大名の通行をはじめ多くの人が通りましたので、これに対応するいろいろな施設が旅人の便を計るために作られました。

た。「長窪宿と芦田宿の中間にある峠の茶屋もそのひとつです。宿場で受け継がれた荷物はその場で馬に積み替えて次の宿に送りました。たくさん荷物を積んで峠を越すのは大変な重労働でした。ですから峠の峠には小松屋という茶屋がござい、力餅などが売られ、高売の宣伝をするために版画が作られ、刷つて、広告を旅の人に配りましたから、中山道の名所としてなかなか敏系盛しました。

今日も峠の茶屋について継立人夫の人達がわいわい、言いながら、「茶屋でひと休みやりやしよう」と茶屋に寄り込み、いっぱいひっかけると、つい二はいと言つようになり、ふだんのあ人よしはどこへやら地金が現われて、旅人からんだり、ち



どり足で街道いっばいになってあるいたり、交通がずいぶん混雑して困ることがたびたびおきました。

おまけに、次の宿にお昼ごろは届くはずの荷物が、真夜中になって届いたりして、多くの人達がとても迷わくしました。

あつちからもこっちからも宿役人のところに、そんな苦情が持ちこまれて来ますので、宿役人から峠の茶屋に「継送りのものともには、酒き出すことはまかりならぬ」ときつぐいいつけました。

なにしろその頃は宿役人のいいつけを守らないと、茶屋ができなくなつて

しまいます。ですから茶屋では早速「継送りの人たちがお酒を飲んで長休みなどしないように、これからは、いっさいお酒は出さないようにいたします。」と言う請書を、宿役人に差し出しました。

それ以来酔松って、茶屋で長休みをしたり、ちどり足で、街道をいっばいになってあるくような人もなくなり、交通の混雑がなくなつて、むかしのような静かな茶屋にもどり、楽しい名所になりました。

お話 竹内純男さん

(峠の茶屋から宿役人に差し出した請書が本陣の石合英男さんのお宅に茶屋の版画は金鳴屋、竹内純男さんのお宅に保管されています。)

大水と芝宮の宮守

古町の集落は長門町を南北に貫く、依田川に沿って中世の頃段丘の下に宿場町として開けた町でしたから、たえず水害の危険にさらされてきました。

自分たちの家や田畑を守るために、水魔との戦は古町に住む人たちの宿命でした。今のように機械はありませんし、土木技術も発つていませんでしたから、水を防ぐためには、みんな人の力にたよっていました。

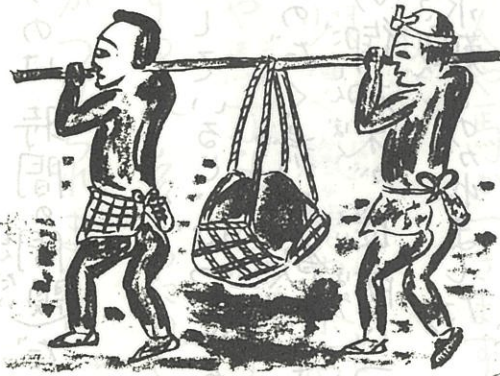
ですから、小さな水害は毎年毎年くり返され、そのたびごとに村中で水防に当たりました。ときには、依田川に沿って築示かれていた、千五百メートルもある堤防がみんなこわされて

しまい家も三軒も流されたこともありました。

水を防ぐのに古町の人たちが一番気を配ったところは上川原(現在のまは)付近でここの提防がこわれると水が浸入し、上宿はもちろん中宿も下宿も流されてしまいますから、ここは提防だけでなく、川除林といって木を植え村の保安林として嚴重に保護をして、水害に具えました。

寛保三年の八月二日といわれていますから、百反も盛りの頃です。数日降り続いた雨で、昼頃から大ごう水となって依田川を流れ上川原の提防は、今にもくずれ落ちそうになり、上の段の南端に祭られている諏訪社芝宮の段丘は、たく流の直撃

を受け、段丘の一部がくずれはじめました。さあたいへんです。村では早鐘を打ち鳴らしこの危険をみんなに知らせました。早鐘をあいずに村中の働ける人はみんな芝宮の辺に集り、木の枝を切りおろし、縄で継ぎ合わせて水よけにしたり、わくを丸太で組み、石を載せて水を防いだり、俵ごエのうを作つて積みあげて水の浸入するのを防ぐなど、水魔との死闘が数時間続けられました。雨が降り続き、水勢はますます強くなるばかりでした。



このまゝですと古町が流がされてしまふのは時間の問題だ、とさえ思われしました。

もう運を天にまかせる思いで、ぼう然としてみると、ぱっしやんと大きな音がして、芝宮の大木が倒れ、依田川のたく流に飲み込まれました。ほんの一瞬のどきどきとでしたが、この御神木が提防につかかり、防水の役を果たし、古町はかろうじて水難をのがれました。

けれども、この付近は、依田川のたく流が満々とたゞえられ、中島沖は流れ、たたえられた満水の中から腹の真赤な大じやが、かまくびを持ちあげて四方を見まわし、水の中に沈んで流れてゆきました。みんなが「芝宮の宮守だ」と、敬馬きの声をあげました。

大門時報(昭八・五)抜すい

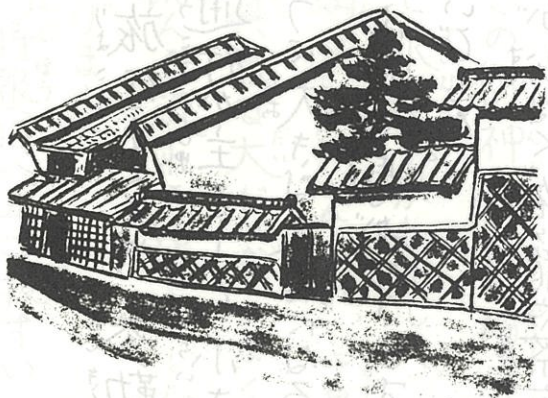
釜鳴屋

中山道をとある人は、幕府の用事で旅行するや、参勤といつて幕府の役務を奉仕する大名の通行が主でした。小さな大名でも一行は百余人で、前田家のように大きな大名になると二千人も行列で、それに荷物とはこぶ人や馬が付きまますから、そのときは、お祭りのようになぎわいでした。

長久保宿は、山麓の小さな町で田や畑が少なく、旅籠や茶店、それに交通や荷物の輸送に關係する人足や馬方などで生活する人が多く、旅の客を相手にお店で商売をする人も多かったのて、家号といつて、お店や家になんか名前がつけられました。「釜鳴屋」というのもそのひとつでした。

にぎわう人の往来に目をつけた。この家の主人は寛永年間のはじめ(二六五頃)お酒を造って売ることになりました。最初の頃は失敗が多く、思うような地酒ができませんが、回を重ねるとに地酒の味がでて、ぼつぼつ酒が売れるようになり、たのこ、大きな酒蔵を造り、米を蒸して酒の原料を造るお釜や、せいろを据えつけて、お酒がたくさんできるように改善しました。

据えつけたお釜や、せいろと、酒蔵に締なわを張り切りさげをつけ、神主さんにお払いをしてもらい、



釜の火入れが行なわれ、ご神事が終わりました。

ことなくご神事がすみ、いよいよお祝いの酒盛りです。造り酒屋の酒盛りですから酒はふんだんにあり、飲めやうたえの大きいわぎになりました。酒盛りがちやうど頂点に達した頃です。ゴ、ゴ、ゴ、グリーンという音が釜場の方から聞えてきました。「あつ、釜が鳴っている。」一人が席を立つと二人三人というように、みんな釜場にやってきました。

なにしろ見あげるような大きなお釜に水がたたえられ、釜の下からは薪がどんと燃され釜の上にはお米がいっぱい詰められたせいろが据えられ、蒸気が大小いくつかの釜やせいろからいっせいに吹きだし、ゴゴゴグリーンと鳴り響く音や

その次女は狂観そのものとした。

米を蒸し大きな樽に仕込むと、みごとな味の地酒ができ、「白菊」という名がつけられて売られだされると、長久保宿はもちろん近在にもよく売れたたちまち清酒白菊の名は世間に知れわたり、方々から酒造りの職人も大勢集まりたくさん酒が造られるようになりました。

今日もゴーという音とグリーンという父釜の音が鳴り響き、釜が鳴るたびに造り酒屋はまします敏系盛しましたのが家号を釜の鳴る家ということで「釜鳴屋」とつけました。

あ話 渡辺 袈裟 幸三

(釜鳴屋は長門町の有形文化財に指定(五三三三)付されています)

笠取峠

徳川家康は天下の統一を進める手段として慶長年間、江戸を中心とする五つの道を整えました。これを「五街道」と呼んでいます。信州を通過したのはこのうち中山道で、東海道を一級とすれば二級にあたり江戸の日本橋を起点として、けわしい碓氷や和田峠を越え木曾路を通り美濃路から更に近江の国に入り草津の宿で東海道といっしょになり、京都まで行く道で、この間には旅人が宿る宿場が六十九もありました。

わたしたちの町にあった長久保宿は江戸から三十三宿目京都からは四十三宿目でした。江戸時代には全国の諸大名が幕府へ軍の役務を奉仕するため武器をもったり大勢の兵士をつれて

江戸に行き、隔年で勤めました。このことを参勤交代と言っています。すがこの大名行列をはじめいろいろな旅の人が通りましたから、この街道もずいぶんにぎわいました。

また長久保宿の東、佐久郡の芦田宿と小県郡長久保宿の間にあたる比較的なだらかな峠の峰には小松屋と言う茶屋があり、峠の茶屋と言われれていました。

茶屋は明治三十年代の道路改修で切り通しがありられたので、茶屋の位置が路面より数メートルも高くなり位置が悪くなったので、峰から約三百メートルほど下がった芦田宿がわに移ってしまいました。が、当時は道と平でしたし、茶屋からは北側の浅間連峰がせまり、佐久の平が眼下に一望でき、茶屋には最適な

な場所でした。

長久保宿が盛んだった頃うたわれていた「長久保甚句」は

〽若葉がくれに浅間が見える

笠取り越えゆく馬子の唄

と、うたわれた歌詩は峠の情景をズバリ言い現わしています。ごすから旅をする人たちにとっては砂ばくのオアシスのようなところでしたから、中山道の名所となっていました。

なだらかな道の峠でしたが大名行列をはじめいろいろな旅をする人が往ったり来たりしましたが、この峠に着くときまって、かむっている旅笠を取り汗をぬぐい景色をながめながらひと休みしましたので、いつのまにか笠を取る峠という

ここで「笠取峠」と呼ばれるようになりました。

煙たつ浅間がたけをながめつつ

風も涼しき笠とりのみね

と、むかしの人がよんだ笠取峠の歌はいかにも峠ごひと
休みする当時の旅人の心情がにじみでていますね。

お話 政市村広司さん

大蛇と大水

本沢川は蓼科山ろくの西と北側にあるいくつもの湧水が
原流となり大門川と合流し依田川にそそがれています。

この本沢川は兩岸がけわしい岩山であつわれ、水がよどむ、
くつもの深いふちがありました。なかでも箱ふちは、東西が奇
岩に囲まれ、うつそうとした樹木が天をおおい激流が数メートル
の高さから大きな箱を伏せたような岩つぼへ落下して水煙とな
り神秘的な感じのするところでした。

むかしから早はつが続くと、村人たちはこうに来ていばらとふ
ちの中に切りこんで、「どうか雨が降りますように」と、お祈りを
すると、たちまち黒い雲が天をおおい、雨が降ると言い伝えら

れていました。その頃の本沢は人がやっと通るだけのせまい道しかなく、狛をする人や行者が通るだけでした。

ある日、えものと求めて村の狛師二人が本沢にやって来ました。長いこと狩をしている二人ですから、獣が通る道はよく知っています。本沢の奥深くまで来ました。いつもの獣道とちがったところを誰れか草を分けに行ったようなあとがあります。「あや、なにものだろう。」と思ひ、そのあとをたどってゆくと、箱ぶちの岸でそのあとは、ぷつぷつりと切れています。

あなががすいたので、持って来たお弁当を開き、お昼をすませ、休息していると、ふちの向こう岸の茂みで、がさつ、という音がしました。驚いて振り向くと、やぶの中に、なんと大蛇ではあ

りませんか。

おそろしいので二人はたがいに顔を見合せていましたが、ひとりの若い狛師がそばにあった鉄砲を取ってかまえました。「うっ、うっ、あ、いけねぞ。」年上の狛師のことは、終わらないうちに、ずどん、とすごい音が四方の山や谷にこだまして、みごとに大蛇の頭を打ちぬきました。

大蛇は敬馬、大きな体を持ちあげると、するすると動いて、ばっしやんと大きな水音をた



てるとふちの中に飛び込みました。

二人は鉄砲をかまへ水面をじっと見つめていました。がふちの奥深く沈んだ大蛇は再び浮きあがって来ませんでした。恐る恐るふちの中とのぞき込んでみましたが、影もかたちもありません。

気が抜けたようにポカンとしていると、ふちの中からもうもうと霧が立ち昇り、真黒な雲が空をいっぱいにおおいはじめ、気味が変わるくなり、その場にいたたまらず、いちもくさんに家に逃げ帰りました。

その日から大粒の雨が三日も降り続き、なお雨は止まずに降り、四日目はついに大豪雨となり、大門をはじめ長久保や古町、立岩の村々、数十軒の家が流され、数十名の人たちが亡くなり

ました。

この水害はいまだかつて村の人々が経験したことのない大ごう水で、五日目によく空が晴れました。

村人の中には、だく流とともに大きな蛇がかま首を持ちあげながら流れ下る次女を見た人が、なん人が現われ、「ありやあきつと赤沼の池の主が、池といっしょに流れ下つたもんだぞなあ……。」と口々に叫びうなずき合いました。

大門時報(昭ハ五)抜すい

若宮さま

むがしの立岩村の人たちは、既に目星をいただいて仕事に行き、夕へに月をいただいて帰るといふようによく働きました。

今日もひとりの村人が朝もやをついて草刈りに沖にやってきました。すがすがし朝の空気を、胸いっぱい吸いながら、来る仕事は、気もちがよく予定どおり進みました。

朝めし前の仕事でしたから、ぼつぼつ引きあげようとする、朝もやの向こうから、ガチャガチャと金物がふれ合うような音が聞えて来ます。「おやつなんだろう。」と思つて、もやをすかして音のするほうを見ると、よろいを着けたさむらいらしい人が、もやの彼方にかすんで、景絵のように立ちつくして、いつこ

に動こうとしません。

ふしぎに思いましたが、こわいもの見たさがこつたつて、恐る恐る近づいて見ると、まだ童顔の抜けきらない若武者で、近づいた村人に気づいて、にらみつけるようにして、し敵でないことがわがると気が抜けたように、ぼつたりとそのはにたおれてしまいました。

村人がさらに近づいてみると

あたりいち面の朝露は傷ついたさむらいの血で、真赤に染まり、見るもむざんな次女若武者がたおれています。近づいた村人に



向かって自心も絶え絶えな若武者は「生きて武士の名をはずかしめることはできない。今、やくしこくれ。」と片手でおびむようになっています。

村人はとまどいましたが身なりや、その気品は名將の御曹子と思われ、あどけない童顔は自分の子供のようにさえ感じ、あまりのむごたらしさに片手で顔をとおいながら思わす「なむあみだぶつ。」と唱えながら求められるまうに、持っていた大鎌で今しやくしました。

このお話が人情の厚い立岩村の人々の間に伝はると、若武者の死をあわれみ沖の地を戦歿の場所として、ここに手厚く葬り村中でお宮を建て、「若宮さま」と呼んでお祭りしました。

お話故 森田 岩男さん

立岩の駒形(その二)

大陽がさんさんと照りつりる、ある百夏の日のことです。そまつな墨染のころもを着た旅の和尚さんが立岩をとおりかかりました。

立岩村は村のまんなかを依田川が流れ東南の川ぞいには起立した高さ数十メートルもある岩がそそり立ちいかにも涼しそうに感じました。川べりの木がけを求めてきれいな依田川の水に手ぬぐいをひたし、したたる汗をぬぐいさると、和尚さんはほきかえったような気がしました。

岸に起立した岩のいただきには数十本の老松が青くすんだ依田川にはえて、見ごとく眺めたから、和尚さんは極楽へ来ているように感じ思わず岩に向かつて心に念仏を唱え続けました。

もの見高い村人数人が集まって旅の和尚さんのしぐさを見守っていました、そのうちのひとりが、「それにしてもあのこつしやん少し

103 立岩の駒形(その三)

おかしいじゃあねえかなあ……」と言いだしました。和尚さんの今心仏はいつまでも続き、みずばらしい身なりについて悪口を言う人もぞました。

ひるさがりの強い日ざしが切り立った岩はだにしりしりと照りつり、もの見高い数人の村人が暑くてがまんできなくなり、家にもどろうとする頃和尚さんの念仏がようやくおわり興味深く見守る村人をしりのめに和尚さんは右の手を岩に向かてぐつと突きだし人さし指で空間になにか書きはじめました。

「ますますあかしいぞい……」村人のざわめきはいつこうに気にせず旅の和尚さんは持つていた金剛杖を二〜三回ふりながら、なにかじゅもんをとびえました。

するとどうでしょう 依田川の水で何回も洗われなにもな

なかった。山石はだのすそになにかがホーと現われました。い合せた村人たちはわが目をしばらく疑っていましたがだれかが「馬の次女」と大声をあげて叫びました。



ひるさがりの強い日ざしにくっきりと馬の次女が浮かびだしています。敬馬の目で村人たちが見守るなかを旅の和尚さんはなにごともしなかったように静かなもの腰で無言のまま一札すると、そのまゝ旅立って行きました。

この話が村中に伝わりと村の人々は、「その和尚さんは、弘

法大師ほうだいしという偉えらいお方にちげえねえ。」と云うことになりました。それからずつとのちのことですが、古今ここんの名工めいこうと言われ、た左甚五郎ひだりじんごろうと言う人が、立岩たちいわを通とおりかかると、あまりにもみごとな馬うまのデッサンデッサンに感心かんしんして、ノミを振かるい駒形こまがたを彫ほりあげました。

村むらの代名詞だいなごしとして、親したしまれている岩いのはだに馬うまの形かたがつき、そして彫ほりあげられると、村むらの人々ひとはみんなが「駒形岩こまがたい」と呼ぶようになりました。

お話故 森田 山岩男さん

小豆とぎの女

大門峠だいもんとうげに一番近い小茂谷こもがやの部落ぶらつは、谷たにあいいにあり、南みなみの窪くぼから流ながれたす浦沢川うらさわがわと北側きたがわの山吹やまぶきの沢さわから流ながれてる清流せいりゅうにそって部落ぶらつができました。

最初の頃さいしょのころは家いえの数かずもすくなく、人ひとどおりもわすかでしたし、閑散かんさんとしていて、静しずかすぎるほどでした。部落ぶらつのまん中なかと東西とうざいによこぎる浦沢川うらさわがわには、木きの橋はしが掛かけられ「すぐじの橋」と呼よばれ、大門峠だいもんとうげのほうに旅たびをする人の便宜べんぎもはられました。

みじかい山国やまぐにの夏なつも終おわり四方しほうの山々やまやまは、すこに紅葉こうようがはじまり、肌寒はださむい秋あきの夕暮ゆふぐれのことです。ひとりの村人むらびとがすぐじの橋はしをわたろうとすると、「シクシク」と女のすすり泣なくような

声が橋の下から聞こえてきます。「あや。」と聞いて足を止め、きき耳をたてると女のすすり泣く声にまじって、「シヨキシヨキシヨキシヨキ……」と、小豆をとくような音が聞こえてきました。村人は急にこわくなり家にとび帰りしました。こんな話が隣の人から隣の人に伝わりと俺もおらも聞いた。という人が数人現れました。なかにいた威勢のよい若者数人がその正体を見とどけることに相談がまると、夕暮を待つ一人の若者が橋のそばの物がけに身をひそめてみると、話のとおり橋の下から、



女の人のむせぶように、すすり泣く声とともに「シヨキシヨキシヨキシヨキ」と小豆をざるに入れて川の中でといているような気味の悪い音が聞こえてきました。「それ、出た。身を物かげにひそめていた若者のあいずこ、待っていたほかの若者数人が、かけつりて橋の下や付近をさがしまわりましたがなんにも見あたりませんでした。」

こんなさわぎがあったせいか、小豆をとく音も、女のすすり泣く声も聞こえませんでした。しばらくするとまた聞いたと言ふ人がはじめました。

今度は人が通るとすすり泣く声も小豆をとく音もぴたっと止み、人が通り過ぎてしまうと、むせび泣く声と小

豆をとぐ音がはじまり、敬馬あとういて振りかえると立白たてしろはぴたつと止やみ、物音ものおとひとつしません。

村むらの人たち数人すうじんがこんな体験たいけんを重ねるようになる。いつのまにか「小豆あずきとぎの女おんな」と呼ぶようになり、行儀ぎようぎの悪い子供こどもには、「いうこときかねと、すぐしの橋あずきの小豆あずきとぎの女おんなにくれしまうぞ。」とって子供こどもをしかるときのことばになつていました。

お話故 柳沢 弥助さん

三年さんねんばかり前県道まへけんどう上田一茅野線かづのせんの道路改修どうろかきしゆがおこなわれ浦沢川うらさわがわには橋はしのかわりにビューム管びゅーまんがいけられ、すぐしの橋あずきの面影おもかげはありません。

おわりに

あかしの人は素朴そぼくで誠実せいじつな生いまを民話みんわや伝説でんせつの中なかに残のこしてくれました。これけすはらしい宝たからの贈り物ものだと思おもいます。宝たからの贈り物ものをなくさないようにと思おもい、数年前すうねんまえ資料しりょうを集め大切に保管たいてんしておき有線放送ゆうせんほうそうで町まちの人に聞きてもらいました。放送原稿ほうそうげんこうと書き終おひつてみると放送ほうそうしただけ捨すてしまふのは惜おぼしいので印刷いんさつすることにしました。

放送ほうそうをするために書いた原稿げんこうはすから私わたくしたちだけの肉付にくづけがありまふのむじ年輩ねんぱいの方々かたがたや史実しじつにくわしいみなさんから、おしやりを受うける雑わづも多おほいと思おもいます。

108
容故と賜りたいと存じます。

今もお元気で引き続き指導してください。あつ頃はともお元気でいろいろはお話をくださったり、指導してくれたのに、今はもう諸者の皆さま、ほんとうに多くの方々の善意とご協力によりまして生れました。心から厚くお礼申しあげます。

昭和二十七年初夏

採録者 児玉 断

長門昔ばなし (第2集)

昭和 60 年 6 月 1 日

採録者 児玉 断
発行